

平成 28 年度研究助成 研究実績報告書

| | |
|-------|------------------------------------|
| 代表研究者 | 西川 一弘 |
| 研究テーマ | スタディーツーリズムの手法を用いた鉄道防災教育プログラムの開発と実証 |

<助成研究の要旨>

東日本大震災以降、さまざまな場面で津波対策が行われています。それは「鉄道」も同じです。紀伊半島の沿岸を走る JR きのくに線では津波襲来までの時間的制約が厳しく、列車からの迅速な避難が求められています。これまで当地では、「実車を使った実践的避難訓練の展開」や「地元の高校と連携した訓練」などに取り組んできました。その取り組みは「世界一の津波対策を目指す」という言葉が聞かれるほど、挑戦的かつ実践的なものであります。特に鉄道会社としては「飛び降り型」の避難などにはあり得ないという状況から、迅速な避難のためには欠かすことが出来ない方法として、他の鉄道会社にも波及しています。

しかし、実践的訓練は継続的に実施されつつも、ダイヤや安全要員配置の制約等から、回数を多く実施することは困難です。また、一般的に防災対策を展開すればするほど「危険な地域」として認識されてしまうことは本意ではなく、立地する地域の振興も同時に達成していく視点、すなわち地域振興に資する防災対策が求められます。

そこで「実際の訓練機会」をより回数多く、普遍化させると同時に、より地域を構造的に学ぶ機会にも深化させる取り組みとして、本研究をスタートさせました。率先避難者を拡大させることを目的に、「防災と言わない防災」の視座のもと、地域資源を学びながら鉄道での避難方法をも学ぶプログラムとして開発したものが、この「鉄學」です。

「鉄學」プログラムの開発後、2016 年 11 月 12 日（土）にモニターツアーを実施し、継続展開に向けた展望を明らかにすることができました。特に鉄道防災教育と地域学習の双方をひとつで達成できるスポット、避難訓練などの「体験型」スポットでの評価が高く、全体的にも列車からの避難方法や手順について学ぶことが可能であると確認できました。

「鉄學」プログラムについては、2017 年 3 月 11 日（土）に JR 西日本和歌山支社の定期津波対処訓練と連携することができ、鉄軌道事業者社内での展開が可能であることも実証されました。また、鉄學プログラムの実施によって、鉄軌道事業者の訓練内容を変化させる可能性があることも明らかになりました。

今後、「鉄學」プログラムは、最終的に学校のカリキュラムでの活用（遠足や社会見学での活用）、一般向けの旅行商品化を目指しています。「スタディーツアー」を前面に出しているものの、学習の満足度を高めるためには、実際の乗客に“学習してもらおうしかけ”が必要であることが明らかになりました。具体的にはガイドの中身や方法、振り返り・学習ツールとして活用できるパンフレットの高度化（テキストブック化）などです。

新年度の取り組みとしては、参加者意識の分析や社会実装に向けた課題の克服を進めていきたいと考えております。